

令和3年度自己評価表		白兎のあいうえお		鳥取県立白兎養護学校	
中長期目標 (学校ビジョン)	人と関わりながら自立と社会参加に向けて 努力する子どもの育成	あ いさつを交わし みんななかよく い のちはひとつ 自分も友達も大切に う んどうをして 健康で元気な身体 え がおいっぱい 楽しんで学ぶ学校 お もいやりのある 豊かな心		今年度の重点目標	・人と関わりながら豊かに生活する児童生徒の育成 ・確かな学びにつながる学習指導の充実 ・児童生徒の健康と安全を守る教育の推進 ・知的障がい教育の専門性の向上・発揮

年度当初						評価結果（9）月		
評価項目	具体項目	学部 学級	現 状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
1 人と関わりながら豊かに生活する児童生徒の育成		小学部	○人との関わりやコミュニケーションの広がり、相手に思いを伝えること等を目標として取り組んでいる児童が多い。 ○児童の実態に合わせて、学校（保育園）間交流等、地域との交流活動の取り組み方について見直す必要がある。	○授業づくりや指導・支援の方法を工夫することで児童同士の関わり の広がり、児童同士が支え合う姿が見られる。 ○児童の実態に合った地域との交流の仕方を実践する。地域に目を向けた教材や体験活動の実践を重ねている。	○児童の実態に合わせた人との関わり方やコミュニケーションの捉え方、指導・支援の仕方について学部全体で学部会（月1回）を通して共通理解図る。 ○学校、保育園と連携を図り、交流の仕方について学部教育課程検討委員会（3回予定）検討する。	○教材・教具や場の設定を工夫することで、教師との関わりから児童同士の関わりへと広がりが見られる。引き続き、感染拡大予防対策への配慮、工夫も必要である。児童の実態に合ったコミュニケーションの方法や支援方法について、職員間で共有する時間を確保し、さらに関わりを深めるための工夫をしていく必要がある。 ○感染拡大予防対策のため、学校間交流等は実施できていない。毎年、児童の実態に合わせて柔軟に交流の仕方を検討していくことを確認した。 ○生活単元学習等で積極的に地域に出て、調べ学習や体験学習を重ねている。	B	○学部会だけでは、実態に合った支援方法を共通理解する時間を確保することは難しいため、人との関わり、コミュニケーションに関する学部研修会を設定する。
	・地域との連携 ・交流及び共同学習	中学部	○地域とつながる活動や行事等を通して、生徒が達成感を持ち人との関わりが広がっている。コロナ禍における交流のあり方をさらに工夫、検討していく必要がある。	○生徒が人と関わる楽しさや、達成感、自己肯定感・有用感をもち、主体的に関わろうとしたり、自分の思いを表現しようとしたりする姿が見られている。	○特別活動の時間や各教科等の学習の中で、生徒が一つの目的を持って協力しながら活動したり、自分の役割を果たしたりできるような学習の機会を学期に1回程度設定する。 ○総合的な学習の時間や各教科等の学習の中で、様々な人と関わる場面や、地域とつながる学習の機会を学期に1回程度設定する。	○総合的な学習の時間や生活単元学習等で生徒が「自分の役割を果たす活動」「自分の思いを表現できる場面」「地域を調べて、出かける活動」の設定等の工夫をしている。 ○作業学習で、末恒地区公民館に育てた花とガーデンピックを届け、直接「ありがとう」と言われることで役立ち感を味わうことができた。	B	○コロナ禍での「様々な人と関わる」「地域とつながる」工夫を継続して行う。オンラインで「誰と」「どのように」関わっていくのかを検討しながら、積極的に学校外との交流を進めていく。
	・地域との連携 協働の推進	高等部	○まちづくりワークショップを通して、地域の方と活動する計画を立て、準備を進めている。地域での販売活動や清掃活動を通して喜ばれる経験を積んでいる。 ○日々の学習や実習等を通して、卒業後の生活について学年に応じたイメージを持ちつつある。	○地域の方とともに活動する中で、地域のために働く姿がみられる。 ○生徒、保護者、学校が適切な自己理解のもと、卒業後の生活をイメージしながら進路について考えている。	○地域の教材や人材を活用しながら実態に応じた交流を設定し、地域社会への参加機会を各作業班が3回以上つくる。生徒が、計画・評価をしながら参画する外部との機会を1回以上設定する。 ○個々の強みや課題を明確にし、日々の学習や実習、懇談等で卒業後の姿を確認することで、生徒、保護者、学校が目標の共有を図る。	○バックづくり、公民館清掃等を実施した。「はくとよろずや」に向け、どの作業班も販売を目標に一生懸命製品作りに取り組んだ。ただし、感染拡大予防対策のため、中止となり実施できていない。公民館祭に向け、可能な交流の仕方を検討しながら準備を進めている。 ○実習を行い、振り返りの会や懇談等を通して、保護者と卒業後について確認し取り組んでいる。コロナ禍の為、進路説明会が実施できず、昨年度に比べ発信が充分とはいえないが、DVDを作成するなど情報発信の工夫をしている。	C	○直接交流ではない方法についても検討し、生徒の様子について地域の方に伝える場面を設定する。中止になった行事等は、コロナ警報等の状況をみながら、公民館と話し合いを行い、可能な地域交流の仕方を検討していく。 ○懇談を有効に生かせるように、進路担当者と連携し、説明資料や確認したいことなど職員で共通理解を図る。通信、DVDを作成し活用したり、個別面談したりしながら、進路についての情報発信を行う。
	病院等との連携	訪問学級	○新型コロナウイルス感染拡大予防対策を日々病院関係者との連携をとりながら行っている。そのため、限られた学習環境（物的・人的）の中で、ICT機器を活用して教師や友達等の人とのつながりを意識した学習を組み立てている。外部とのつながりが持ちにくい中で個々の社会の広がりが難しい。	○児童生徒が安心安全に生活し、安定した状態で学習をしている。 ○人や社会とのつながりを楽しみにしている。	○病棟看護師、理学療法士と特に連携を取り、申し受けやリハビリ懇談会で実態把握、共通理解をしながら支援の改善や充実を図る。 ○訪問学級や病院関係者以外の人や社会とつながることができるような活動をICT機器の活用や啓発につながる学習を計画していく。	○リハビリ懇談会を実施し、学習に生かすことが出来ている。病棟看護師と児童生徒の共通理解の場を設定して支援の改善を図っている。コロナウイルス感染拡大予防対策として担当の医師、看護師と密に連携が取れている。 ○特別活動を中心に社会で話題になっている行事等を題材として取り入れその中で本校や他の機関の方々ともつながるように工夫している。公民館の展示やHPで発信に努めている。	B	○引き続き、関係性を継続させ、連携を行っていく。 ○修学旅行の代替行事では、出向けない代わりに映像や鳥取県庁の職員の方から動画メッセージなどを通して、社会とのつながりを持つ学習を行う。引き続きHP等の発信に努める。
2 確かな学びにつながる学習指導の充実		小学部	○徹底した実態把握を基に、児童に合った目標設定と授業作り、次の段階を見据えた支援のあり方を考えて実践しようとしている。 ○生活単元学習等の合わせた指導について、新学習指導要領の教科の内容を意識して目標設定、授業作りを進めている。 ○教科の学習についても新学習指導要領を基に教材研究や実践を重ねている。	○児童の実態、段階に応じた指導、支援を重ねている。 ○生活単元学習において、教科の目標や内容が学習計画に明記され、教科を意識した授業が展開されている。 ○教科学習（国語、算数）、課題学習の内容、教材が充実している。	○実態把握の仕方や教科の内容を意識した目標設定、評価の仕方等について学部会で共通理解を図る。 ○教科の学習（国語、算数）や課題学習について、学部会で授業づくりと教材の共有化を行う（学期に2回程度）。	○実態に合った授業づくりをしたり、支援の仕方を工夫したりして日々実践を重ねている。実態把握の仕方や3観点での評価の仕方について、共有する時間が十分にとれていない。 ○生活単元学習は、学習計画を基に、各教科の目標や実態に合った教材を工夫しながら授業づくりを行っている。 ○教科学習、課題学習の教材を共有する機会を持つことができなかった。	C	○グループにおける学習活動については、教師間で事前に学習内容について確認し、児童の実態に応じた支援ができるような準備をしておく。 ○教科担当と連携し、教材を紹介する機会を持つ。また、作成した教材を整理し、検索をかけてすぐに参考にできるような工夫をする。
	・ICT機器の活用 ・新学習指導要領に対応した授業研究	中学部	○中学部段階での進路学習の見直しを今年度行うことになっている。学校図書館やICT機器を活用することで身に付けたい情報活用能力を検討する必要がある。主体的・対話的で深い学びを意識しながら授業改善に取り組んでいる。	○生徒が自ら課題を設定し、情報を収集・活用しながら、課題解決したり表現したりしている。	○校内の進路指導担当と連携して、中学部段階で必要な進路学習の内容を見直す。 ○学校図書館やICT機器を活用した学習活動の紹介や中学部段階で大切にすることを学部会や学部研究会を通して共通理解を図る。 ○主体的・対話的で深い学びの実現に向けた子どもの姿や授業改善の工夫について、学部会で年2回共通理解を図る。	○校内の進路指導担当と連携し、高等部や地域とつながりながら進路学習の内容を見直している。 ○生徒が情報を収集・活用できるよう、実態に応じたICT機器を活用した学習に取り組んでいる。 ○単元計画書を活用した授業改善の工夫について、学部会で共通理解を図った。生徒がより主体的に取り組めるよう、生徒が自ら課題を設定したり、選択したりする場面を設定している。	C	○生徒、保護者、教員が進路の見通しが持てるよう、進路指導担当と連携して、伝える内容や時期等について整理する。 ○学校図書館やICT機器の活用について他学部の使用方法を知る機会を設定する。情報活用能力を育成するための大切な視点について共通理解を図る。 ○教師がICT機器の使い方に慣れるよう、Google ClassroomやGoogle Formsなどを使うようにする。

2 確かな学びにつながる学習指導の充実		高等部	○新学習指導要領をもとに年間指導計画の見直しを行って内容を整理し、昨年度より一部の教科で単元計画書を作成しながら授業を行っている。	○個に応じた目標を設定し、学習評価をしながら、「自立と社会参加」につながる授業づくりが行われる。	○指導内容確認表を活用して個々の実態を明確にし、生徒の実態に応じながら年間指導計画を運用する。ねらいや支援の共通理解を図りながら実践する。	○指導内容確認表を見直し、個別の指導計画の前期評価や後期目標設定を行った。それぞれの教員が「高等部の生徒の自立と社会参加」について研究を進めている。	C	○個に応じた課題を意識しながら指導・支援に取り組めるように、指導計画の目標と学習計画を確認できる資料を作成する。学部で活用の仕方について共通理解を図り、教科を決めて活用しながら授業作りを行う。
	・新学習指導要領に対応した取り組み	訪問学級	○各教科を合わせた指導(おはなし活動)のグループ学習では、学習内容、個人の手持てや表出について話し合い共通理解することができたが、他の教科においても話し合う機会をもち、共通理解していく必要がある。 ○児童生徒の目標、学習のねらい等を総合的に見た学習内容や支援を考えていく必要がある。	○声、表情、体の動きや教育機器等で、気持ちを表出する意欲や場面が増える。	○実態に応じた様々な感覚を生かした環境の工夫を行い、学部会や共通理解の会で学部内でアイデアを出し合い共通理解を図る。 ○グループ研究会や実践の事前事後に一人一実践を話し合う中で教員間で児童生徒の表出について話し合う機会をもつ。	○学部会や日々の伝達で児童生徒の様子を共通理解できている。「この教材は、どうだったか。」「こういう教材を使ってみたい。」など日常的に情報交換をしたり、学部会で学習計画を提案、シュミレーションする中で様々なアイデアを出し合うことが出来ている。 ○実践のまとめシートを記入し児童生徒の実態や課題について整理したり、共通理解したりする中で多角的な視点からのアプローチにつながる契機となりつつある。	B	○引き続き情報交換を行い、アイデアを出し合っていく。準備等を協働する中で、教職員のキャリアや得意分野を活かしながら教材研究を行っていく。 ○グループ研究会の中で、授業実践後に経過報告を行い、児童生徒の変容について共通理解をしたり、課題を明確にしたりしてよりよい授業作りを目指す。
	・児童生徒の適切な支援につながる記録等の整理	教務部	○児童生徒に対する適切な支援をめざして、現在、個別の諸計画をはじめとして、各分掌から出ている実態把握、年間を通じた様々な指導の記録等が多数ある。内容的に重複しているもの等、一見してわかりにくさもあり、日々の指導につながるものにしていく必要がある。	○書き物が目標設定のよりどころ、児童生徒理解や日々の支援につながるものになっている。 ○書き物が一覧で分かり、児童生徒の様子について検索しやすくなっている。	○学部や分掌の意見を集約し連携しながら、内容の整理、記述の簡素化、項目の削減等を行う。 ○書き物の用途(項目)、保存場所、記録者、担当分掌などが分かる一覧の作成をする。	○書き物の用途・名称・時期・保存場所・記録者・担当を一覧にした「児童生徒に係る書き物 一覧表」を作成し、1年間における諸々の記録が一目で分かるようになった。	B	○引き続き、全体で書き物の見直しを行っていく。 ○個別的教育支援計画作成における方法や作成後の扱いについて検討を行い、必要に応じて見直しを行う。 ○学校生活における諸計画の位置づけやねらい、諸々の書き物と児童生徒の教育とのつながり等、分かりやすく整理する。
	・新学習指導要領に対応した授業研究	研究部	○新学習指導要領の3つの観点に沿った年間指導計画の見直しを行ってきた。整理した内容を意識して実践を積み重ねる段階である。	○学習指導要領の3つの観点を意識した授業実践や学習の評価ができている。	○新しい年間指導計画や単元計画書の活用のポイントを掲示板等で提示し、基本研修者や一人一実践を授業研究で行う職員を中心に作成を呼びかける。	○年間指導計画や単元計画書の活用については、今年度の研究テーマから外れるため啓発の体制が十分に取れていなかった。しかし、授業の質を高めるためには必要な事柄であり、分掌内で活用の仕方について改めて考えていきたい。 ○年間指導計画や単元計画書については、基本研修の先生方をはじめとして研究の内容に応じて活用されているが、活用についての呼びかけは十分にできていない。	C	○新しい年間指導計画や単元計画書の活用のポイント、メリット等について分掌で話し合う機会を持ち、掲示板で周知する。 ○授業改善の手立てとして新しい年間指導計画や単元計画書を活用できるよう、掲示板等で周知をする。
	・ICT機器の活用	情報教育部	○学習活動でのICT機器の活用が十分ではない。 ○知的障がいのある本校児童生徒に適した情報教育について検討し、実践していく必要がある。 ○読み聞かせ等の読書に親しむ授業は活発に行われているが、調べ学習等の授業にはなかなか活用されていない。	○Google Workspaceを活用した学習が単一障がい学級を中心に行われている。児童生徒の実態に合ったアプリケーションや情報機器の活用が、重複障がい学級を中心に進んでいる。 ○児童生徒の実態に合った情報教育が実践され、事例がまとめられている。 ○図書館や図書館資料を活用した調べ学習や探究的な学習が実践され、事例がまとめられている。	○Google Workspaceの活用やアプリケーション利用に関する研修会を企画・運営する。ICTサポート事業を活用し、専門的な知識を取り入れた情報教育を進める。 ○他校の実践事例等を積極的に紹介する。情報教育を校内研究テーマに設定している先生と情報共有し、校内の実践事例をまとめる。 ○知的障がいのある児童生徒の情報活用能力の洗い出しを行い、司書教諭等と授業担当で連携し各学部において実践を行う。	○単一障がい学級では高等部でGoogle Classroomで学習の振り返りを行うなど活用が進みつつある。重複障がい学級では課題学習を中心に、訪問学級ではリモート学習の場面でアプリケーションを活用した学習に取り組んでいる。ICTサポート事業で夏季研修会を開催し、教員の専門性向上を図った。 ○ICT機器の活用が広がり、実践を行った教員が増えてきている。高等部では情報モラルに関する学習を行うなど、社会自立に向けた実践が行われている。 ○生活単元学習や総合的な学習の時間での調べ学習で、図書館資料の活用が増えてきている。教職員アンケートでは、82%が「図書館資料を活用した学習を実施した」と回答した。担任、司書教諭、学校司書、学部図書館担当が連携しながら資料収集や学習環境を整えた。	B	○アプリやGoogle Workspaceを活用した授業を提案していく。校内写真コンテストを開催し、カメラアプリを切り口として児童生徒の活用につなげていく。校内研修会を引き続き企画・運営し、全職員の専門性向上とICT活用に取り組む。 ○校内の実践事例を学校掲示板で紹介する。蓄積された事例や職員アンケートから課題分析し、本校の実態に合う情報教育について検討していく。 ○図書館利用の仕方や必要な情報の見つけ方等、本校の実態に合った情報活用能力を検討する。調べ方、まとめ方等の指導について、司書教諭、担当が助言し、TTでの実践を広げていく。
3 児童生徒の健康と安全を守る教育の推進		全学部	○感染症の状況に合わせて白兔の「新しい生活様式」の沿って感染症予防に取り組んでいる。 ○感染症予防については、教職員、児童生徒とともに意識して取り組む姿が見られつつある。日々の健康保持や防災への意識、日常生活における安全の意識についても繰り返し指導している。	○感染症対策を徹底しながらも授業や活動の仕方を工夫しながら取り組んでいる。 ○個々の実態に合わせて健康安全教育の取り組みを実践し、児童生徒自身が感染症予防や自らの健康について意識した態度や行動が見れるようになる。	○児童生徒の実態と感染の状況や県のガイドラインに合わせて、適宜本校の「新しい生活様式」を更新し、感染症対策をとりながら安全に学校生活を過ごすための工夫を行う。 ○児童生徒が健康、安全を意識するための指導、支援の工夫について、掲示板や学部会の中で共有する機会を持つ。	○県のガイドライン、本校の「新しい学校生活様式」を意識しながら、感染拡大予防対策に努めている。 ○ガイドラインに沿って消毒の徹底、密を避ける(距離をとる、人数制限する)等意識して取り組んだ。 ○感染拡大予防対策に合わせて健康安全に関する取り組みを実施することで、手洗いや消毒、換気、汗の始末や水分補給など進んで行う姿がみられるようになってきている。	B	○引き続き、職朝や学部会等で地域の感染状況に応じた感染拡大予防対策について共通理解を図り、柔軟に対応する。 ○児童生徒の体調管理について、報告、連絡、相談を徹底し、早期対応を行う。 ○県のガイドラインにそって、今後も継続して指導・支援を行う。 ○今後もマスク着用や手洗い等について指導・支援していく。また、防災への取り組みも引き続き実施する。
	・防災・安全教育の推進	健康・安全部	○安全や保健の分野では、児童生徒及び教職員に対して「自分の命は、自分で守る」学習や指導について意識の向上が見られつつあるが、環境や食育の分野においても意識の向上を図っていく必要がある。	○「自分の命は自分で守る」方法を学ぼうとする児童生徒の育成を図るとともに、教職員の意識が向上している。	○保健、食育、安全、環境の各分野から児童生徒への学習指導ができるように、教職員に対して掲示板等を通じて情報発信し、理解啓発を行う。	○交通安全教室や避難訓練を通して、実態に応じた「命を守る」学習を実施し、さらには、教職員対象の研修や引き渡し訓練を実施することで、児童生徒及び教職員の意識の向上を図ることができた。 ○掲示板等を通して、環境教育や食育に関する情報を発信した。各学部において、ゴミに関する内容や栄養に関する内容などを取り扱った授業が増えてきている。	B	○避難訓練や研修等の振り返りを行い、改善点、変更点の共通理解を図り、今後に活かす。 ○引き続き掲示板等を通して、環境教育や食育に関して情報発信を行っていく。分掌会で、各学部の取り組みについて定期的に報告を行い、その取り組みを全校にも紹介することで啓発を行っていく。
教4 向上の知・専的発門障 揮性がのい		小学部	○学部会等で児童の実態、状況について共通理解する機会を持つことで学部全体で共有して指導にあたる意識を持ちつつあるが、まだ各担任が悩み等を抱え込んでいる状況もある。	○児童の実態、状況について学部全体で情報共有が行われ、学部全体で児童を見ていく意識、一貫した指導しようとする意識が高まっている。	○報告、連絡、相談の流れを徹底することで児童の気になる状況の早期発見に努める。 ○支援部、生徒指導、SSW、SC等、各担当との連携を密に図る。	○個別の相談から学年会、ケース会を行い、指導・支援の工夫につながっている。 ○支援部、生徒指導等、各担当と連携をし、学部のチームとして児童の気になる状況を早期発見し、検討、実践できている。	B	○担任が抱え込まないよう、児童の気になる状況について、チームとして早期に対応する。 ○必要に応じて、児童に係わる小グループの会を設定し、指導・支援の充実を図る

4	知的障がい教育の専門性の向上・発揮	チームで取り組む支援	中学部	○校内及び外部の関係諸機関との情報の共有や連携はできつつあるが、指導・支援についての共有がまだできていない部分がある。	○生徒の行動の意味や背景、内面について話し合い、生徒理解を図るとともに、同じ方向性で指導・支援を行っている。 ○校内外の関係者と迅速に情報共有が行われ、指導・支援に活かされている。	○発達年齢や生活年齢を大切にした支援方法等について職朝、主任会、学部会等で共通理解を図る。行動の背景にある生徒一人一人の「憧れ、願い、思い」を大切に生徒理解に努める。 ○具体的な指導・支援方法について、校内(支援部、生徒指導、SSW、SC等、各担当)及び外部の関係諸機関との連携を密に図る。	○生徒の様子や支援方法等について、職朝や学部会等で情報共有が図られている。 ○中学部段階での発達年齢や生活年齢を大切にした支援方法等について、学部会で共通理解を図った。 ○必要に応じて校内外の関係者と会議を開き、情報共有が行われている。具体的な支援内容について整理し、指導・支援に活かしていく必要がある。	B	○生徒の行動の意味や背景、内面について話し合ったことを、職朝や学部会で共通理解を図り指導に活かす。 ○生徒一人一人の教育的ニーズを明確にして、具体的にどのような支援が必要なのか整理する。
			高等部	○学年・学部だけで指導支援するのではなく、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーなど校内資源につなげる体制が整ってきている。	○気になる児童生徒早期発見のための教師の視点(チェックシート)や情報共有シート等を活用して校内で情報共有することで、指導・支援が素早く行われる。	○職朝、主任会、学部会等で生徒の情報を共有するとともに、連絡、相談し合う体制を構築することで、学年や学部で連携しながら指導・支援にあたるようにする。支援部と連携し、ケース会等で支援について検討することで、共通理解のもと指導にあたる。	○気になる生徒事案に対しては、支援部が中心となってメンバーを集め、ケース会を実施し、指導・支援について話し合いを多く持った。内容を書面で回覧したり、学部会等で職員の共通理解を図った。医療や福祉との連携も行った。チェックシートは、多くのものが点検することで、生徒について確認することができた。	B	○情報共有シートの活用の仕方については支援部と連携し、活用の仕方について考える。 ○ヒヤリハット等発覚した時点ですぐに、状況把握、対策を話し合う体制を取り、タイムリーに事例研を持つ。
		・校内支援の充実 ・センター的機能の発揮	支援部	○教育相談と生徒指導は情報共有シート等を活用することを通して連携し、校内支援につなげることが多くなった。しかしキャリア教育の視点での切れ目のない支援や連携体制はまだ整っておらず、進路等に対しての支援を模索中である。 ○校外への教育相談や通級指導等で支援体制は確立してきている。しかし、校内資源を活用した校外支援もおこなっているが、校内資源の把握や発信がまだ不十分である。	○生徒指導とキャリア教育と教育相談の連携体制が整い、児童一人一人の自立と社会参加につながるような校内支援体制が準備できている。 ○校内資源を活用した校外支援体制が定着している。	○ケース会等を通して関係機関につながる校内教育相談体制を整えたり、教職員と学習参観や会議等を通して繋がりをもつことを通して相談しやすい環境を整えたりする。 ○キャリア教育の視点で、進路研修会や職場見学を実施し、小学部から高等部までのキャリア教育の情報を校内に発信する。 ○校内資源の情報を収集しながら人材を把握し、教育相談に活用する。それを支援部だよりを使って情報発信する。	○生徒指導の問題や家庭に関わる問題等、各学部内の相談体制と支援部の連携が迅速に行われ、それぞれの相談に対応でき始めている。キャリア教育(カウンセリング、外部専門家相談、進路)では、校内教育相談の内容と関連づけた実施が進んでいる。 ○進路研修や現場研修は実施した。 ○現在把握している校内資源の活用に努めながら教育相談を行った。	B	○校内教育相談と生徒指導とキャリア教育担当の連携をより密にしていく。 ○キャリア教育(進路指導等)を進めていくために、「進路の手引き」の活用を進める。 ○さらに人材を把握し、周知を図るとともに、校外への教育相談を充実する。
5	業務改善の取組	・チームで取り組む支援	研究部	○コロナ禍で研修の機会が十分ではなく、校内で専門性向上のための保障が必要である。	○個々の実践や校内研修を通して、知的障がいの児童生徒への理解が深まっている。	○実践を深めながら個々の専門性が向上するよう教職員のニーズに応じた小グループを編成し、月1回グループ研を開催する。各グループと連携して進捗状況を把握する。 ○15分研修を含めた校内研修の充実を図るため、時期や内容を検討・改善し参加者の増加につなげる。	○テーマに沿ったグループ分けを行い、各グループで工夫して研究を進めている。児童生徒に向き合った研究が進みつつある。テーマによっては合同研究や学部を超えた研究を希望されるところもあったが、今年度は全体テーマの「自立と社会参加」の実態に合わせて学部ごとのグループとした。 ○15分研修は予定通り月1回程度開催し、知的障がいに関する専門性の向上の一助となっている。	C	○引き続き、分掌部会でグループ研究の進捗状況を確認しながら、各学部のニーズを把握する。 ○15分研修は継続して取り組む。
		○分掌業務の見直し ○担任の業務量と副担任の業務量のアンバランスの解消	学校全体	○分掌の再編が学校運営や業務改善に生かされているか検証する必要がある。 ○担任業務と分掌業務(副担任業務)について均等に業務分担できたか検証する必要がある。	○分掌再編を行ったことで、業務の改善がみられた。 ○担任と副担任の業務分担はある程度バランスがとれている。	○分掌再編した内容について年2回の点検する。 ○担任・副担任の業務分担について年2回の点検する。	○分掌の再編を行い、業務内容がわかりやすくなったが、反面偏り等の課題が見えてきた。 ○担任・副担任の業務分担について、学部に応じた効果的な実践をすることが急がれる。	C	○分掌再編を行った趣旨を再度確認するとともに、業務の分担と精選を図る

評価基準 A:十分達成〔100%〕 B:概ね達成〔80%程度〕 C:変化の兆し〔60%程度〕 D:まだ不十分〔40%程度〕 E:目標・方策の見直し〔30%以下〕